

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李 光輝

李光輝氏の博士論文「日本語と韓国語における引用構文由来の文末表現について」の審査結果について報告する。

本論文は、現代日本語と現代韓国語における引用構文由来の文末表現を対象に、対照言語学的な観点から、両言語の類似点や相違点について考察しつつ、各表現の意味機能の詳細な分析を行ったものである。従来、日本語韓国語とも引用構文由来の文末表現について総合的な分析は少なく、日韓両語の対照研究はほとんどない状況にある。本論文では、日韓両語の表現を対照し、対応形態の違いや意味の広がりやの違いから、日本語と韓国語の諸表現が持つ特徴の違いや文法化の程度を明らかにしようとしたものである。

本論文は7章からなっており、第1章では、具体的な例で日韓両語の対応関係のずれを示しながら、本論文のねらいと考察の対象とする表現の範囲について述べている。

第2章では、これまでの先行研究をまとめ、理論的背景と本論文の立場について述べた。その際、日本語と韓国語の引用構文は二つの点で大きく異なることを指摘した。一つは、日本語と異なり、韓国語では直接引用構文と間接引用構文が形態的・統語的に明確に区別されるという点、もう一つは、日本語では引用助詞「と」が必須で不可欠なものであるのに対し、韓国語では引用助詞「-(i)lako」「-ko」の省略が可能であり、さらに、間接引用構文において形式動詞「ha(ta) (言う)」の省略も頻繁に行われる点である。

第3章では、日本語の文末表現「って」とそれに対応する韓国語について分析を行っている。分析に際しては、本論文で取り上げる引用構文由来の表現では、元話者または情報源が誰か、つまり話し手自身、聞き手、第三者のうちの誰かという観点が意味機能の分析において非常に重要であることを指摘している。つまり、聞き手が元話者の場合、その元発話に対する話し手の認知上の状態が表現されるのだと考えられ、第三者が元話者の場合、元発話が第三者からの情報ゆえに、結果的に伝聞のような意味機能をもつようになると考えられる。さらに、話し手自身が元話者の場合、発話時現在における話し手の心的態度が表れると考えられる。

このような観点から、日本語「って」と対応する韓国語の文末表現との対照を行った結果、韓国語の場合、意味機能による形態的・統語的な区別があることが明らかになった。具体的には、元話者が聞き手のとき、聞き返すような場合（単純確認質問）や先取りして聞くような場合（先取り確認質問）では、韓国語は「-tako」が対応し、問い返すような場合（真意確認質問）や言いさすような場合（真意受容保留）には、韓国語の「-tani」が対応することを指摘している。また、元話者が話し手のときは、対応する韓国語の使われ方から「再述強調」「疑似再述強調」の2つの意味機能があることを述べ、韓国語で特定の表現が対応しない「って」については、それが直接引用に基づく用法のものであることを明らかにした。さらに、元話者または情報源が第三者のとき、対応する韓国語は特定の第三者か不特定の第三者かにより形態的・統語的に区別されることを指摘した。以上の考察から、日本語「って」に対して韓国語では元話者の違いなどによって異なる形態が用いられること、その対応の状況から「って」の意味機能は、文脈に依存する語用論的なものであると指摘している。

第4章では、文末において確認質問の意味をもつ韓国語の「-tamyense」をとりあげ、語彙的な対応を見せない日本語との対照を手がかりに、元話者が聞き手の場合（タイプⅠ）と第三者の場合（タイプⅡ）を区別する必要性を指摘しつつ、タイプⅠ・Ⅱの形態的・統語的・意味機能的な違いについて考察を行っている。まず、文末で使われる表現「-myense」に特有な意味機能（聞き手の文脈的な矛盾）があることを述べた後、これが「-tamyense」のタイプⅠとパラレル（聞き手の元発話との文脈的な矛盾）であることを指摘し、タイプⅠを「矛盾確認質問」と名付けた。次に、タイプⅠが

「-tamyense」以外の形態でも使われるのに対し、タイプⅡでは「-tamyense」の形態のみが可能であること、日本語の「そうだね」「んだった?」に対応することからその意味を「伝聞確認質問」と名付けた。さらに、タイプⅡの「-tamyense」と日本語の「そうだね」「んだった?」の対応についても、詳しい分析を行い、場面や文の種類によって対応関係が変わることを明らかにしている。

第5章では、文末において類似した意味機能を表す「ってば」「ったら」「-tanikka」をとりあげ、これらの表現の相違点を明らかにしている。まず、「ってば」「ったら」と「-tanikka」が対応しない場合を分析し、対応しない要因として、「ってば」「ったら」では直接引用・間接引用の区別なしに使われる引用助詞「と」の特徴、さらに、間接引用構文の形態である「-tanikka」の形態・統語的な特徴が関係していると指摘している。

さらに、「-tanikka」が「-ta(ko ha)nikka (way) ilay/kulay」という、話し手が自分の発話などを旧情報の確定的な条件としてとりあげ、それを受け入れない聞き手に「なぜそうなのか」と問いかけられるような構文に基づくものであるのに対し、「ってば」「ったら」は「Pといえば/といたらP」のような仮定により成り立つ当為的な事柄を提示する表現に由来するものであると考えられるとし、それがこれらの表現の違いを生んでいると述べている。

第6章では、これまで取り上げた文末表現の文法化について論じている。共時的な観点から、引用構文の性質をどれくらい保持・喪失しているか（形態的な復元性、主語の表示可能性、引用の意味機能の保持性）、新しい機能を獲得しているか（新たな統語機能の獲得、新たな意味の獲得）という基準のもとで分析を行っている。分析の結果、平叙の形態のみが認められる「-takoⅡ」

「-tamyenseⅡ」「-tanikkaⅡ」は文法化の度合いが高く、特に、連結語尾のような接続の仕方を見せる「-taniⅡ」はもっとも文法化の度合いが高いと判断している。また、「って」に比べ、話し手の「再述強調」に特化した意味をもつ「ってば」「ったら」は文法化の度合いが高いと見ている。さらに、各形態の意味機能について考察を行い、引用構文由来の文末表現の分析においては、語用論的な意味と意味論的な意味の区別が必要なこと、さらに「って」「-tako」などに含まれる接続助詞・連結語尾の意味機能に関する分析も必要なことを指摘した。

最後の7章では、これまでの考察をまとめ、結論として、日本語に比べ韓国語のほうが、さまざまな意味に特化した引用構文由来の文末表現が存在し、その文法化が進んでいるとし、このことは、従来からの、日本語は一つの形式に複数の意味を対応させる多様性・多機能性の傾向が韓国語より顕著に見られるという指摘を裏付けるものであると述べている。

本論文の特徴は、従来、日本語でも韓国語でも個別に論じられてきた両言語の引用構文由来の文末表現を日韓対照研究の手法で分析し、その意味機能を総合的に捉えようとしている点にある。極めて複雑な表現の分析に取り組み、日韓の違いとその背景についていくつか新たな点を明らかにしたことは、本論文の大きな成果だと言えよう。特に、韓国語については、引用構文由来の諸形態の意味機能をより包括的な形で捉えることができている。その成果は、日本語学、韓国語学だけでなく言語学や日本語教育、韓国語教育においても有用なものである。

審査においては、個々の形態についての意味記述をより詳細に行う必要があること、その際には形態を区別する基準で不十分なところがあるので注意すべきであること、意味機能とそれぞれの形態の関係がわかりにくいので、きちんと整理する必要があることが指摘されたほか、日韓の訳文の比較に重点が置かれる傾向があり、日韓の現象の比較を心がける必要があること、日韓の違いについて、その一般化に努力してほしいなど、今後検討すべき様々な課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。